

の五葉或は四葉をつく、状くまざ、に似てや、小なり、此葉も若き時は青色にして、老る時は葉邊一分許變白する事、くまざ、に同じ、また和漢三才圖會に、くまざ、燒葉ざ、を以て兩種とし、燒葉ざ、はその高さ不過尺といへるは、即ち此くまざ、の事なるべし、扱くまざ、は、諸國山中極めて多きものにて、江都にも處々これあるがうちに、四谷大木戸の前なる笹寺のもの、其名殊に高し、これは寛永の比御鷹狩の時、この寺に立よらせ給ひしに、そこにこざ、熊ざ、いと多かりけるをみそなはし給ひて、以來は笹寺とよぶべしと上意ありしよし、江戸砂子にみえたり、今も方一坪程にくまざ、を植置しは、即その遺跡なりといへり、

〔雍州府志土產〕竹略○中 一種篠葉每一枚、葉端周圍細白似刀刃、是謂刃篠。此篠莖短而著土、茶人愛之、種茶亭之前庭、凡洛北山上寒氣甚而霜雪重、故葉端瘁白、土人掘來而鬻、京師、

五枚篠

〔和漢三才圖會八十五〕篠略○中

五枚篠五末伊佐佐 高尺餘、葉深青色、似篠竹葉而短、每莖五葉叢生、能繁茂、植庭院、玩之、所謂越王竹、高

止尺餘者、此等之類乎、

〔古今要覽稿草木〕五枚篠 おかめざ、

五枚篠、一名豐後篠、一名おかめざ、は、高さ一尺八九寸より、或は三四尺に至る、その幹極めて細小なりといへ共、每節隆起する事、頗る雄竹の如し、此竹すべて根上二三節より、三枝或は四枝を分ちて、三葉四葉を一蓋とし、それより以上は、每節五枝を別ちて、五葉を一蓋とす、その枝長さ四五分にして、二節あり、葉は即其二節上より生じて蓋をなすを以て、これを熟視せざる時は唯葉莖のみにして、枝なきが如し、其梢上に至りては、また三枝を生じ、三葉を一蓋とする事、なを根上の二三節と同じ、扱根上の三葉節の左側に付て生ずる時は、其次の五葉は必ず節の右側に生じ、二葉は左に向、三葉は右に向ふ、その右に向ふ三葉は、中の一葉大にして、左右の二葉はや、小